

石川淳「狐の生肝」論―狐・疱瘡・本草

山口俊雄

《Alle Dinge sind Gift, und nichts ist ohne Gift, allein die Dosis macht dass ein Ding kein Gift ist.》Paracelsus⁽¹⁾
《是に於て神農乃ち始めて民に教へて五穀を播種し、土地の宜しき、燥湿肥瘠⁽²⁾高下を相し、百草の滋味、水泉の甘苦を嘗め、民をして辟就⁽³⁾する所を知らしむ。此の時に当りて、一日に七十毒に遇ふ。》「淮南子」
《およそ蘭語とは阿蘭陀一国の語のみならず、南蛮渡来の羅典葡萄牙を承けて、また後来の英仏魯にもわたる。語は口舌に習ひまた書籍にまなぶ。書籍は医書にとどまらず、天文理化算数兵法、各科の学みな海彼の客船に乗つてこの浦に到る。すなはち、蘭学の智慧はわが鎖国の領内に西欧開化の小天地を築けるに似たり。源流早く崎陽に発す。》石川淳⁽³⁾

はじめに

- 一 作品の素材・典拠
- 二 狐・疱瘡・本草
- 三 狐智・狐毒・人智
- 四 後日談―江戸時代医学史・高野長英・胡笳
おわりに

はじめに

石川淳「狐の生肝」は『新潮』（一九五九・五）に発表され、日本文芸家協会編『創作代表選集 24 昭和三十四年前期』（講談社、一九五九・八）への収載を挟んで石川淳の作品集『影』（中央公論社、一九五九・一一）に収録された四〇〇字詰め原稿五十五枚余りの短篇小説である。

あらすじは次のようなものである。

五代將軍徳川綱吉の時代のこと、春間近の江戸、王子は名主の滝のほとり、闇夜に狐火を点して、人に化けた狐たちが集まる。リーダー格の王子の十郎が、真崎の九郎・笠森のお初・穴守の赤鼻といった稲荷狐た

ちや余一・お長といった面々に持ち出したのは、丹波篠山藩下屋敷で飼われていた丹頂鶴の番いが姿を消し、狐が食べたと疑われており、疱瘡が流行し、篠山藩主の幼少の世子も冒され、綱吉の子どもも難症に苦しんでいる折から、篠山藩の名医・柚木桃庵が疱瘡の妙薬を調査すべく、鶴の償いに狐の生肝を求めて来ようとしているのにどう対処すべきかという難題であった。下屋敷を預かる藩士・古鳥大八を誑かして鶴の問題をごまかそうした策略も失敗に終わり、狐たちは本草の毒を受けて異形の姿を曝す桃庵と対面する。生肝の提供を拒絶する王子の十郎だが、意外にも余一が、お長と二人で鶴を食べたと白状する。人智に憧れ、人間に生まれ変わるべく靈草靈鳥をむさぼり食うなかで鶴も食べたのだったが、体内には狐毒が増すばかり、どうせ死ぬならば自分たちの生肝を提供したいと言う。桃庵は、狐毒極まれば凝って人智になるかもしれない、人間に生まれ変わった節には、つとめて医を学び、私の志を継げ、と応じ、美しい男女に化けたままの余一・お長を芝居の道行きよろしく連れ去って行く。

後代、文政年中、長崎の町に一箇の秀才が現われ、オランダ人に就いて紅毛の医術、特に痘科を学び、蘭語が達者で俊敏ゆえに前身が狐ではないかと周囲が疑うほどだったが、美しい妻ともども夭折した。人と交わることを好まなかったが、高野長英とは交遊し、長英が蘭語に習熟できたのはこの友のおかげだと言われた。

同時代評として管見に入ったのは、中田耕治「文芸時評〈新潮〉」のみである。

この作品は、おそらく現代文学の最後の、光栄ある文学上の孤立したエキストラヴァガンザを代表する。これほど奇怪なアレゴリイは、

まず一種の擬装されたモラリテイ・プレイとしか呼びようがないのだが、しかも、異様なほど強靱な融通無碍の語りくちは、この作家の驚くほど豊かな頭脳の働きをます。すなわち、私はここで、二つの特徴を指摘しなければならぬ。この作品の世界は、黄表紙ながらで、王子の狐、穴守の狐、笠森のコンコンさままでくり出して滑稽小説のように見えるが、作者は滑稽小説などというものをおよそ信じていないし、ここで、あの有名な制作理論「^(マ)刻工の現実の相よりもほんの少し速く、一秒の何十万分の一をいくつにも割った一つぐらゐ速く、空虚なる空間を充実させようとする精神の努力」としてこの作品を理解することも、まず酔狂を Outcome 出まい。それでは何か。

一つ、答えにはなるまいが、石川淳の精神の努力は、あくまで孤立したエキストラヴァガンザの復権をもくろむことにある。二つ、その手つづきで、彼は、わざわざ人間的な事象をいちど徹底的に自然に還元してしまうのだ。したがって、これはソテイでもパロディでもない。石川淳には一種やみがたい物語欲というべきものがあって、これがあかも奇怪にアレゴリックなかたちをとるのだが、あえて言え、これは物語の持つ蠱惑に対する、なかば本気で、そのくせ、なかば空想的な信仰によるものだろう。『近代文学』一九五九六、六四頁)

「狐の生肝」に触れた箇所を全文を引いた。石川淳論として、自然主義系のリアリズムに収まり難い石川の小説をめぐるジャンル論的な言及としては興味深い、作品についての具体的な読みが示されていない。

単行本『影』刊行後の井澤義雄「石川淳著 影―変貌と変身の劇―独立の作品世界に至りえた短篇」(『週刊読書人』一九五九・二二・一四)で

は、収録作品名としてタイトルが挙がるだけで内容に関わる言及は全くない。

その後の言及としては、作品集・アンソロジーの解説、作中の《荒ぶる神》⁽⁵⁾イメージを拾う立石伯「解説 荒ぶる神と闇の力」(石川淳「落花・蜃気楼・霊薬十二神丹」講談社、一九九二、二六一頁)や《幻妖の翳》を強調する東雅夫「編者解説」(東編《妖怪文藝〈巻之一〉モノノケ大合戦》小学館、二〇〇五)が管見に入ったが、作品を丁寧に読んでみせるものではない。

畦地芳弘「『狐の生肝』の輪廻転生譚」(『石川淳後期作品解説』和泉書院、二〇〇九)が具体的な掘り下げのある初めての論と言えそうで、伊庭可笑「さてはけたりきつねのつうじん 狐通人」や朋誠堂喜三三「おやのかきうてはらつみ 親敵打腹鞭」等を踏まえた本作の黄表紙的な特徴を指摘し、余一・お長の生まれ変わりを描いてはいるものの、狐と人間とが《別個の一類》、《別個の文化圏》(六三二頁)であり、作者は狐の側にあると強調する。

畦地が挙げた黄表紙、特に「ねりけ 狐通人」が意識されたことはまず間違いないだろうが、黄表紙的な特徴は本作のあくまでも設定上の一面であり、狐と人間との関係もダイナミックなものであり、作者(語り手)が単純にどちらかに与しているとは言い難い。

本稿では、黄表紙以外にも踏まえられていると思われる素材(典拠)を確認した上で、それらの素材をまとめ上げる論理、狐⇌稲荷神・疱瘡神・本草学の対立・相関の構図、〈狐と人間との弁証法〉とも言うべきものの作動のさまを明らかにし、作品の読みの深化を試みたい。

一 作品の素材・典拠

石川淳が素材として活用したと思われるものを確認しておこう。作品冒頭、江戸府内の主だった稲荷狐たちが人に化けて狐火を点しつつ夜の王子稲荷に集まるという場面は、明らかに〈王子の狐火〉のイメージを踏まえていよう。

「若一王子縁起絵巻」に《毎年十二月晦日の夜関東三拾三ヶ国の狐稲荷之社へ火を燈し来る図なり此松ハ同夜狐集りて装束すと云伝ふ故衣裳畠又ハ装束場といふ》⁽⁶⁾と記された伝承は、歌川広重「名所江戸百景」の一枚「王子装束場の木大晦日の狐火」に幻想色豊かに図像化されており、よく知られていよう。石川の敬慕する大田南畝「六阿弥陀詣」(『ひとと草』文化三「一八〇六」年)に《王子のみや居のむかひに、むかしは装束松といひしも、今はいつしか榎にかはれる、かたはらの細道をつたひつ、ゆけば》⁽⁷⁾との考証的な言及も見られる。

これと併せて、王子の十郎、真崎の九郎、笠森のお初、豊川の弥次兵衛、穴守の赤鼻といった江戸の知られた稲荷社を担う狐たちを複数登場させ、一種稲荷尽し的な特徴を示すという点⁽⁸⁾で、既に畦地が指摘しているように、三崎、真崎、笠森、九郎助、杉の森の稲荷を担う狐たちが登場する黄表紙「ねりけ 狐通人」(伊庭可笑作、鳥居清長画、安永九「一七八〇」年)の趣向を踏まえていよう。狐の中に悪者を設定するのも両者共通しており、石川作では江戸の外の穴守の赤鼻が悪者であり江戸の狐に対する批評者でもあり、黄表紙では三崎と笠森の恋路を邪魔する九郎助が悪者である。

次に、〈狐の生肝〉についてである。

○中川の家に伝へて、疱瘡の薬を製せられしに、狐の生肝を取りて調ずる事なりけり。延宝の頃とや、今年は国に帰りたらば、薬を調ぜんと有りける春、君帰らせ給ひなば、十五以上の児の生肝をとらせ給ひなんと、誰とはなく、国中にふれければ、子を持ちたる農商、皆所を去りて他国へ移り住き、郡中人なきが如し。止みがたくて、其由を公にも訴へ、さて虚言なる由を、こまやかにふれ知らせければ、漸にして民も帰りけり。是は狐のしわざとて、其年は薬の沙汰はなくて事過ぎけり。又の年になりて、物頭の勇壮なるが申しけるは、さきには狐の崇とて、薬をも調ぜられざりし、府下に居侍る狐の所為とて、数代調ぜられたる薬の絶えなんも、君威の薄きに似候間、某に命ぜられ候へ、狐狩して、さやうの類こらしめ申すべし、と申しければ、然るべしと有りて、また其事の外には知れざりけるに、ある朝、第一の重臣中川何がし、とみの事有りて、物頭の許に來りしかば、渴仰して亭に請じ、さて如何様の御事にやと申ししかば、わどのが昔そゝろなりし事ども、法の許しがたき事どもなり。この書付を見て、申し披きあるべしと、一通を渡しければ、是を見るに、まだ若かりしより、年盛りまで、若氣にて有りし過失を書きつゝけたり。披き終りて云ふやう、是は皆若き頃の血氣にて、仕損じたりしあやまちどもなり、只今の事にてはなく候へども、申し披くべき様なし、と答へければ、さらば切腹候へとの命なり、疾く／＼と有りければ、力およばぬ事なり、その用意いたすべし、しばらく御待ち候へとて、奥に入りて、此由を妻女に告げければ、驚き入りて、思もよらぬ事と、あひ歎き悲しむ事限なし。かくて、早く事をへぬべし、沐浴の湯沸せよとて、其用意するうちに、家のうち挙り

て、兎角の事はわかつたず、絶え入るばかりなりけるに、湯を焼く下部の、亭の庭を見やるに、堀の上に数多の狐、頭をならべて窺き居たり。亭の方をむきて、今や今やと云ふに、供にありける士、手を振りて、いまだしと答へけり。此よしを見附けて、急ぎ主人に私語きければ、これを聞きて、さこそあらめ、此上は立ち出でて、使者を切り捨て、もし事違ひなば、其時こそ我兎も角もならんと独言して、今こそ自殺し侍らめとて、亭へ出でければ、はや其氣を知りけるか、悉く逃げ失せけり。頓て此由を申し、山々を狩して、多くの狐を取りければ、何事もなくてやみけり。「窓のすさみ追加」巻之下（中川家狐狩の話）、『有朋堂文庫 八六窓のすさみ・武野俗談・江戸著聞集』有朋堂書店、一九一八、三〇九、三一〇頁）

ここには狐の生肝を取って疱瘡の薬を作る例が示されるとともに、石川作品の登場人物・古島大八が狐に誑かされるエピソードの材源も見出せる。¹⁰⁾

冒頭の《中川の家》について、笹間良彦は、豊後国岡藩藩主・中川家のこととしてゐる。¹¹⁾だとすれば、延宝年間（一六七三―八一年）ということ、第四代藩主・中川久恒の頃の話となる。綱吉の第五代將軍就任は延宝八（一六八〇）年、《綱吉のことも》（三八九）徳松の生年が延宝七（一六七九）年、没年が天和三（一六八三）年だから、時代設定に大きなズレはない。

「窓のすさみ」はもともと写本の形で伝存、書名の表記も、窓のすさひ、窓の須佐美、窓の壽佐美、窓能須佐美、窓農壽左美……等々、幅がある。明治時代以降、活字化された。拙稿の底本の校訂者・塚本哲三「緒言」の記述を引いておこう。

窓のすさみと同書追加とは、共に松崎堯臣の作述する所に係り、徳川時代の初め頃より享保の当時に至る見聞の雑記にして、録する所、忠孝、貞節、仁慈、勇武等の美談其多きに居り、健全なる修養書の一として読者を利する所尠ならず、文亦古雅と通俗とよく融和調節して、此種記事文中の白眉と称するに足る。(前掲書、一頁)

作者・松崎堯臣について、『日本国語大辞典』では「松崎観瀾」の見出しで立項、《江戸中期の儒学者。丹波国（兵庫県）の人。名は堯臣。字は子充。通称左（佐）吉。別号白圭（はつけい）。丹波篠山藩士の子。朱子学、古義学、陽明学、徂徠学など近世儒学諸流派に通じ、篠山藩執政をつとめた。著に「正言」「君道撮要」「窓のすさみ」など。天和二（宝暦三年（一六八二—一七五三）とする。¹²⁾

《狐の生肝》について、別の書物に次のような記述もある。

尾張大納言殿、津島にて鷹野あそばせし時に、烏犀円合せたまはんに、狐の活胆をとらせよと、加島道円に仰せられしかば、餌さし市兵衛承て、狐をとらへしかど、私用の事有て、帰り度とおもひしに、生肝をぬくべき人、外にあらざれば、是非なく、しばらくありし。御台所の中間がいはいく、その事、某し致すべきまゝ、肉と皮とをたまはれと云しかば、御用の外なれば安き事なり。偏に汝をたのむぞとてかへりし。かの者、やがて生肝をとりし。その時節にあたり、清洲にありしかれが妻、俄に物にくるひ、其役人にもあらずして、某を殺す事、そのいはれなし。これによつて、此者を取殺し、件の恨をはらさんと罵りければ、人々おどろき、それは、汝がひが

事なり。さあらば、何ぞ殺せし者には附もせで、子細もしらざる妻を、かく悩しけるぞと云ければ、いや、かれがごとき、某を殺すのみか。¹³⁾肉まで喰ふやうなる強敵の者なれば、我附事もなりがたし。夫婦の中なるまゝ、此ものを殺さんと、さまざまに狂ひし。此事、御前にて沙汰ありしを、大守きこしめされ、狐は霊なるものなれば、道理をせめて云きかさば、定て聞わくる事もありなんとて、真島権左衛門をめし、汝ゆきて、何条其者を悩すぞ。此方よりいひ付て殺させたり。又我慰にも、狐がりして殺さんに、此たびの事は、殊に薬を合せん事なれば、同じ死すべき命を、人の為になせし事は、悦しきにあらずや。速に退べしと、仰のおもむきを申聞せしに、物つき涙をながし、何事により、われらごときの畜類、大君の厳命を、かくばかり承る事、有がたく候へと、云もはてず、たちまちに物の気はさらにき。〔新著聞集〕第十六 清直篇（狐君命をおそる）の段¹³⁾

医師・加島道円の名前から清洲藩主のち初代尾張藩主・徳川義直の時代のことだろう。¹⁴⁾この話では、生肝を取られた狐あるいはその仲間が、殺した者（御台所の中間）の妻に取り憑いていたが、生肝を取ったのは薬剤調合のためであり、人に役立つのだからと納得させられ、憑くのをやめている。《大君の厳命》に服する《畜類》という構図になっているが、人命救済のために役立つのだから狐の死が決して無駄にはならない、という論理は、《わしの手に生肝をえて、何とするかといへば、かの藩世子の病を癒し、江戸城内の急を救ふにとどまらず、これにて市中にはびこる瘡毒を掃ひ、諸人のわざはひをのぞかう》（四〇八）という「狐の生肝」における桃庵の論理に通じるものであろう。

なお、右に《烏犀円合せたまはんに》とあるが、人見必大による本草書『本朝食鑑』（平野氏伝左衛門・平野屋勝左衛門、元禄一〇〔一六九七〕卷之十一、獸類部にも、《今人生ケナカラ狐ノ腹ヲ割イテ肝ヲ取り烏犀円ヲ整フ》（原文の漢文を訓読）とある。『日本国語大辞典』に拠れば、『烏犀角（うさいかく）の粉末で製した解熱剤』が「烏犀円」であり、「烏犀角」は、『犀（さい）の黒色の角（つの）。漢方で、子供の解熱剤に用いる。特に疱疹（ほうそう）には唯一の良薬とされた』。

『新著聞集』について、辞書の記述を引いておこう。《十八卷十二冊。随筆。一雪著、神谷養勇軒編。寛延二年（一七四九）大阪河内屋茂兵衛刊。【成立事情】本書は、宝永元年（一七〇四）一雪序の『統著聞集』を、紀伊和歌山藩士神谷養勇軒が編集しなおして出版したもの「略」。【内容】忠孝・慈愛・酬恩・報仇・崇行・勝蹟・勇烈・佞奸・崇厲・奇怪・執心・冤魂・往生・殃禍・才智・清直・俗談・雜事の十八編目に分け、奇談・雜録など総計三七六話を収める。本書は、近世説話の一流流というべく、井原西鶴の作品に共通する説話、また累（かさね）伝説など著名な説話を数多く収載する。』

再び「窓のすさみ 追加」から〈狐の生肝〉に関わる別の話を見ておこう。

○日本橋辺の商家、少女の久しく疾に沈みぬるを苦みて、所々の神仏に祈願しけるが、雑司谷の鬼子母神へ日々参りて祈念しけるに、若き女の来て拝み居けるが、側近く立寄りて、御ぬしは御娘子の御煩ひ故、御祈願候て、日々御参詣候事いたはしく候、それに付き、妾も深き願の候ひて、これへ参り候が、わらはが願は、御配慮をたのみ参らせてとげ申したく候、御娘子の御やまひはわらはうけあひ

申し候、やがてすら／＼と御本復あるべく候、只妾が願をば叶へたが給へ、と涙を流し云ひけり。そのさまいともあはれにて、且は不思議なる事なれば、此男も驚きて、思ひがけなき事を承るかな、但わが女の疾をうけあひ、快くしてたべんと有るうへは、そなたの望の事、我等が力にて調ふべき事ならば、いかにも叶へ申さん、先づ御身はいかなる人ぞといへば、妾は実は目黒辺り住める狐にて候が、父は此頃彼辺の人にとられ、近きうちに生肝をとらるゝとて、家内に搦おかれ、過分の価にて人の方へつかはす筈に候故、是を償ひて救ひ申す事なりがたし、御ぬしならでは頼み奉る方なく候故、申し出し候と、かきくどき語りければ、それはいと易き事なり、明日ゆきて救ふべし、わが女の疾をば、ともかくにもたのむと云ふに、それはうけがひ候へば、何の御案じの事もなく候、親の命を偏にたのみまゐらすと、互にたのもしくて別れけり。明けの日目黒に尋ねゆき、家居の体も聞きおきぬれば、其家にいたりて見れば、大なる家に人少く、主人は老体にて坐し居たり。茶をこひて立ちより、しばらく時の物語して見廻すに、狐のありかも見えざる故、若此家に狐など飼れ候やと問へど、さやうの物はなしと云ふ、不思議やと思ひて、やゝ久しく休みて語りある中に、縁の上に、風呂敷やうの物に包みたる物有りしが、白狐の足をふみ出せり。さてはと思ひ、あれは何故おかれしや、あの狐を望み候、我に給へと云へば、あれは深川辺の医師の、薬に用ふるため、生肝を取らんとて、とくよりの頼に候を、やう／＼一昨日とらへ候、白狐は希なる物にてえがたし、故にまゐらせがたく候、御望に候はゞ、重ねてとりおき遣すべし、と云ひければ、我等宿願の仔細候ひて、此狐に限りて命ごひ致したく候へば、重ねては待ち難し、是を給はらば、二十金礼謝にま

ゐらせんといへど、是は明日取に参る筈なれば、何ほどの礼金有りと進じ難しと、固くいなびける所に、その者の子の庭に居けるが、父の言は我等も存じ候て、去りがたき事に候へども、此人の是程に御望み事余儀もなし、且は彼人は薬ながら殺さむよし、是はたすけんと有るなれば、先づ其方に許容有りて然るべしと申しければ、父もせんかたなき体にて、然らばまゐらせんと云ふ。殊の外に喜び、むすこの方のとり持過分のいたりなり、しかと礼謝申したく候へども、今日は持合せず、明日必ず御礼申さんとて、此の狐をとりて放し、さて翌日になりて、昨日の礼に、使して金をもたせ遣しけるに、其家には昨日の者は一人もなくて、よの者の家居なりければ、昨日の事を問ふに、かつて不知^{しらず}、思ふに昨日は其家を一日かりて、右の事をなしたるとみゆ、約を納るは窓よりし、人をたぶらかすは闇所よりするためしこれなり。寛保二「二七四二」年六月の事なり。（窓のすさみ追加）巻之上（目黒の白狐）、前掲書二五〇（二五二頁）

商家の少女がその後どうなったかの言及がないので、これはおそらく、生肝を取られるために犠牲となる狐の救済（解放）にこと寄せて礼金をせしめようと人間が仕組んだかなり手の込んだ詐欺（未遂）だったのであろう。ただ、《薬に用ふるため、生肝を取》という文化の存在を読み取ることができる。

以上、いくつかの書から、〈製薬のために狐の生肝を取る〉という文化が存在し、そこから石川が素材を得ていたであろうことを確認した。次に見ておきたいのが、「狐の生肝」作中の〈藩邸の鶴を奪った狐への報復〉という設定の素材である。「窓のすさみ追加」の中に次のような段がある。

○篠山の先君大安公、府下の別業に飼はれる鶴を、狐のとりたると見えて、はしたなく喰ひ散しおきけり。頓て絹^{わな}をかけつ、二三日に及べどもかゝらざりければ、王地山とて、稲荷の祠ある所へ使を遣し、社頭にて云ふやう、君の御飼鳥を狐の取りたる罪許すべからず、二三日絹をかけぬれどかゝらず、その狐を早く出すべし、さなくば此社壇を破壊して捨てさせ給はんと旨なりと、云ひすて、帰りぬ。その明の朝、老さらばひたる狐、うちなやまされたるが如くなるが、わなの前に死して有りけり。それより後、他の鳥をとる事、たえて無りけり。狐も国によるにや。（窓のすさみ追加）巻之下（大安公鶴をとりたる狐）、前掲書三一、三二二頁）

《篠山の先君大安公》というのは慶安二（一六四九）寛文九（一六六九）年に篠山藩藩主を勤めた松平康信（一六〇〇～八二）のことである。綱吉將軍の時代よりも少し早い時期のことになるうか。

《府下の別業》を江戸の下屋敷と取ること、《王地山》の《王地》を江戸の王子の別表記とみなすことも絶対的に不可能ということはないだろうが、篠山に王地山という地名が存在することや、末尾の《狐も国によるにや》の《国》が江戸あるいは武蔵国を指すとは考えにくいことなどから、もとの話は国もとの丹波篠山でのことと思われる。

それを石川は、王地＝王子の音通もヒントになったのだろうか、王子の狐で有名な江戸の話に仕立て変えた。そして、その上で、鶴を奪った犯人の狐を差し出させて狐の生肝を取するという《二重底のたくらみ》（三八九）として、〈君公の鶴の殺傷に対する狐への報復〉というエピソードと《狐の生肝の獲得》というエピソードを接続してみせたのである。

作品冒頭の王子稲荷での会合の場面で穴守の赤鼻が《篠山衆がたつて所望といふなら、おいばれ狐一匹に縄うつて突き出せば、ついけりがつかう》(三八八)と口を挟むが、この取引きのイメージも右の段を踏まえたものだろう。

篠山藩主は、のち、寛延元(一七四八)年に形原松平家から青山家に変わるが、この青山家に仕えたのが、先述の通り「窓のすさみ」の著者・松崎堯臣であった。

もう一つ素材関連で確認しておきたいのが、王子の十郎が江戸の稲荷狐一統を相手に言う《唐土龍門の鯉の黒焼こそ疱瘡の妙薬》(三九一)のことである。

大納言いまだ竹千代君と申せし御時、御疱瘡かろく被^レ遊候様にと、色々の御持薬或は呪^{まじ}なひ申上候。其中に唐土龍門の下に集る鯉を黒焼にして御浴被^レ遊候へば、御疱瘡甚だ軽しと被^二聞召^一、將軍家の御威勢にて此事難かるべきやとて、唐土の大王へ朝鮮より申継ぎやりて、頓て龍門の鯉を取、朝鮮迄来り、朝鮮にて宗対馬守家来立越し吟味の上、黒焼にして来る。則是を黒鯉の御湯と号して四季の土用に御浴被^レ遊けりとなり。万次郎殿「家治の異母弟・徳川重好の幼名」にも左様に被^レ遊けると也。誠に日本將軍家の權威は夥^{おびただしき}敷事なり。(「当時珍説要秘録 卷之一」(大納言家治公へ唐土より鯉魚の御湯献上の事)⁽¹⁶⁾)

このエピソードが「狐の生肝」に活用されていることは間違いないが、五代將軍綱吉の治下という時代設定からすれば、家治(元文二「一七三七」)・貞享三「一七八六」のことは後世の話となるため、語

り手は《これよりはるかのかのち、十代將軍家治、いまだ幼少のみぎり、さはいはひにこの妙薬をえて瘡毒を解いたとつたへられるのが記録上初見のやうである》(三九六)と辻褄合わせを施している。

「当時珍説要秘録」(宝暦六「一七五六」年)は、その痛烈な幕政批判のために処刑された講釈師・馬場文耕が《九代家重時代の幕府内の出来事や、諸侯や旗本達の噂話や逸話を、明晰な文章でおもしろく述べたもの》⁽¹⁷⁾と評価されている。

以上、この章では、作品を成り立たせるために石川が活用したと思しい素材・典拠について、稿者が確認できたものを一覧してみた。この作業を踏まえ、次の章では、石川がどのような作品世界を創出したか、検討しよう。

二 狐・疱瘡・本草

作品世界を支配する空間的構図として《狐の世界》と《人間の世界》との対立がある。

前章で見たように、藩主が大事にしている鶴を食い殺した狐たちに対する報復として稲荷の破却を言つて人間が狐を脅す例があり、また疱瘡の薬として狐の生肝が必要なために人間のための犠牲として狐の死を求める例があった。力関係のヒエラルキーに則してねじ伏せる場合もあれば、有用性を盾に取つて死を納得させる場合もあった。害獣か、あるいは益獣か。いずれにせよ、対立構図は明白で、それは「狐の生肝」においても同様であり、物語設定の前提となっている。

注意したいのは時代設定である。最後の「四」、後日談部分で一気に

文政期に飛ぶ以外は、『五代將軍』『綱吉のこども』（三八九）在世中のこととなっている。なぜ綱吉の時代なのか。前章で素材について確認したが、必ずしも綱吉の時代と特定・限定できるものは少なかった。では、なぜ「狐の生肝」がことさらに綱吉の時代の話として設定されたのか。

作中、江戸の稲荷狐たちが柚木桃庵対策を相談し合う際に、真崎の九郎が、『今の公方は生類あはれみのふれを出しはしても、憐憫をかけられてゐるやつは犬とか鷹とか、とつくに人間に降参して、毒気の抜けたいくぢなしかりだ。狐は人間をあはれんでなんぞやるものか』（四〇五）と発言するが、この『生類あはれみのふれ』（生類憐みの令）⁽¹⁸⁾が出された時代に設定するために綱吉治下としたのではないだろうか。

保護対象は犬や鷹だけでなく、広く捨て子、高齢者、妊婦、馬、魚介類、昆虫類等々にまで及んだが、その嚴罰主義により評判が悪かったのは周知の通りである。ただし、文治政治への転換、儒教の国教化を進めた綱吉の、仁政を目標とした施策であったことは忘れてはなるまい。

仁政を理念とする生類憐みが強調される時代に取って物語を構えることで、狐の生肝を取るという行為の残酷さ、割り切れなさ、延いては人間／狐の支配・被支配の力学の非対称性が否応なく浮かび上がって来るだろう。

この人間／狐の対立構図は、疱瘡が組み込まれることによってさらに立体化する。

人類の歴史において長らく疱瘡（天然痘）が猛威を振るい、人類を悩ませて来たことはよく知られている。命に関わるし、助かってもし痘痕（あばた）を残す。わが国で牛痘法が一定程度普及して、疱瘡がかなりコントロールできるようになるのは十九世紀に入ってから江戸後期のことであった。

富士川游『日本疾病史』（一九二二初版）には、天平（奈良時代）以降の書物で確認できる疱瘡（痘瘡）の流行がリストアップされているが、江戸時代の流行は次の通り十五回を数える。

- 一六一九（元和五）年
- 一六五四（承応三）
- 一六七九（延宝七）
- 一六八二（天和二）
- 一七〇二（元禄一五）
- 一七〇八（宝永五）
- 一七〇九（宝永六）
- 一七一（正徳元）
- 一七一二（承徳二）
- 一七二〇（享保五）
- 一七二三（享保八）
- 一七四六（延享三）
- 一七四八（寛延元）
- 一七七三（安永二）
- 一八三八（天保九）⁽¹⁹⁾

『武江年表』には、これ以外の一八二五（文政八）、一八六一（文久元）年が記されている。⁽²⁰⁾

そもそも感染症であることが認識されるまでに時間がかかり、『文化年間、橋本伯寿出でて、痘瘡、麻疹、黴毒、疥癬を挙げ、これを有形伝染の四病となし、「断毒論」を著わして、その説を主張するに至り、こ

ここに痘瘡をもって、純然たる伝染病となすの意見ありて現われ」（富士川前掲書、一一八頁）るのを待たねばならなかった。また、種痘法の普及も幕末期であり、そのため、江戸時代、長らく民俗、民間信仰として、厄除けに《こどもに赤い布をきせ》たり、《戸ごとに鎮西八郎御宿の札を貼りつけ》（「狐の生肝」三八九）たり、痘瘡神が祀られたりしていたのである。

『日本国語大辞典』で「痘瘡神（いもがみ）」を引くと、《痘瘡（ほうそう）、天然痘をつかさどる神。この病いをまぬがれ、また、軽くするために祈る。ほうそうがみ。いものかみ。》とあるが、H・O・ローテルムンド『痘瘡神―江戸時代の病いをめぐる民間信仰の研究』（岩波書店、一九九五）は、善神／悪神の両面性を持ち、《畏れられつつも幸いをもたらすものと見なされて歓待される賓客神と同じような神として認識されていた》（二〇四頁）とする⁽²¹⁾。

この両義性、きちんと遇することで幸いをもたらし、さもなくば災厄をもたらすという性質について、「狐の生肝」では次のように説明されている。

痘瘡神のすがたをもし絵にかけば、どうなるとおもふ。われら狐が見てさへぞつとするやうな世にすさまじい風態ではないか。おなじ絵すがたのことにして、この厄病神と対になるやうなものすごい神体を、おぬし、どこぞで見かけたおぼえはないか。「略」われらの仕へる稲荷神のおんすがた、もしこれを絵にかけば、すさまじいことに於て、厄病神にゆめおとるまい。「略」大きな声ではいへぬが、ともに人間に乗りうつて、たたりする神ぢや。稲荷神と痘瘡神と、もしかすると、なにやらで遠縁ぐらゐにあたるか知れぬぞ。うかつ

なことを口ばしつて、人間よりさきに、狐がたたりを受けるな。
（三九二）

十郎が九郎をたしなめる中での発言だが、痘瘡神と稲荷神との類縁性、《すさまじい風態》の《たたりする神》としての共通性に触れていることに注意しておきたい。人間や狐の力によってコントロールできない、うまく扱わないと命に関わるような超越的な力として想定されている。

稲荷信仰は、宗教民俗学者の五来重が《稲荷信仰はきわめて単純であるとともに、雑多であり、はつきりした教理があるわけでもなく、教祖、教団もなく、組織も体系もない。いわば得体が知れないのである。それだけに広いとともに奥深くて、不気味な宗教現象である》⁽²²⁾と云うように、伏見稲荷の穀霊神的縁起に仏教系の荼吉尼天信仰も絡んだ大衆的かつ複雑怪奇な宗教現象である。中世後期、関東における狐信仰がそこに習合し、江戸・関東の稲荷信仰の隆盛を見ることになる⁽²³⁾。

作中、王子の十郎が《稲荷を信ずることふかき人間には、こちらから福運をさづける》（四〇七）と述べるように、江戸時代の稲荷信仰の核心は何よりもまず現世利益であったが、稲荷神の由来の一つとされる荼枳尼天が、仏門に帰依し護法神になる以前は人の心臓を喰らうような怖ろしい神であり、中世日本で狐に乗った美女として描かれる一方、飯綱信仰、おとら狐など、恐ろしい呪詛神として扱われる一面もあり、そのあたりのイメージも石川は踏まえているのではなからうか。

痘瘡神と稲荷神が《すさまじい風態》の《たたりする神》として類比されていることは既に見たが、この類比の場にはもう一つ登場する存在がある。

《道術神妙》（三九四）、《かくれなき神通のもの》（四〇四）である篠

山藩の《名医》(三九〇) 柚木桃庵である。

王子・名主の滝で桃庵と対面した十郎は、人に化けた姿を狐に戻された他の狐たちが《悲鳴をあげて逃げまどふ》なか、《からくも首をもたげて》、次のような姿を目の当たりにする。

ふりあふげば、ただ見る。風の中にひとのかたちあり、地におりてたけ高く立つた。そのかたち、いかなるものか。白髪みだれるにまかせ、白衣に夜の灰色をながし、手足あくまでも黒く、面相荒れ狂ふに似て、鼻はいかり口はゆがみ耳はひしげたのは、おそらく本草の毒を身に受けたものと知れたが、目のみあやしいまでに光つて、壮者よりもつよい気合を發した。十郎をのいて、ひそかにおもふやう。

「や、これはどうぢや。これほどにすさまじいがたは、わしもまだ見たことがない。絵にも筆にもおよばぬ。わが稲荷神にまさつて、荒ぶる神と見うけたぞ。」(四〇六)

先に触れられていた疱瘡神や稲荷神に勝る《すさまじいがた》を曝す桃庵。稲荷神や疱瘡神といったたりする神の力に拮抗し、それらをコントロールしようとするならば、稲荷神に勝る《荒ぶる神》でなくてはならないわけだが、ここには農耕・医薬・商業の創始者として神格化された中国古代の伝説上の帝王・神農の姿が重ね合わせられていよう。神農について、辞典の記述は次の通りである。

人身牛頭で角(つの)をもつとされ、《淮南子》(修務訓)によると「古代、人々は草を食べ、水を飲み、木の実を採り、肉を摂取して

生活していたが、しばしば疾病や毒傷に苦しめられていた。そこで神農は初めて農耕を教え、種々の植物の滋味や飲料水の良否を調べ、その鑑別を知らしめた。これによって神農は一日に七〇回も中毒した」という。「略」中国では神農を医薬祖神として祀(まつ)る風習が後代まで行われた。日本でもその風習は取り入れられ、とりわけ鎌倉時代以降、神農の像を描き、それに賛詩を施した神農画賛を作つて崇拜する習慣が医薬業界に定着し、明治時代まで続いた。今日でも各地で神農祭が行われ、またおびただしい数の神農画賛が伝存している。(『岩波 世界人名大辞典』JapanKnowledge 原文(横書き)のピリオド・コンマは句読点に、アラビア数字は漢数字に改めた。)

この記述から、桃庵の《本草の毒を身に受けた》《すさまじいがた》が神農の姿とびつたり重なり合うことが分かる。中国最古の本草書が「神農本草経」と名付けられたことは付け加える必要もあるまい。²⁾

この章の冒頭でも触れたように、本作における人間と狐との対立構図は明らかだが、それは、人を、そして狐をも困らせる疱瘡神というすさまじい存在、それに対峙しようとし、医薬のために狐を犠牲に供することを厭わない柚木桃庵⇨神農というこれまたすさまじい存在、そしてこの柚木桃庵に抵抗しようとする狐⇨稲荷神というすさまじい存在、これらの三つが拮抗し合うことで、言わば三つ巴になって物語が展開してゆく。

その展開の具体相について、次の章で見ることになろう。

三 狐智・狐毒・人智

《一流の秘法》によつて《瘡瘡にはてきめんの妙薬》(三九〇)を編み出した柚木桃庵は、《鶴一番のつぐのひととて、狐一番をさし出すべし》(四〇八)とただ要求するだけでなく、《年老いて精おとろへた》狐では効能が薄いので、《血気さかりのもの二匹、なんちらの中より撰みだせ》との条件まで付けて来る。しかも、《この二匹、かならずしも身の不運をなげくにおよばぬ。身を殺せば、またその身にむくいあらうか》とまで言われては、狐としてたまったものではない。

ただし、桃庵は、ただ生肝欲しさに都合の良いことを言つたわけではなかつた。

わしの手に生肝をえて、何とするかといへば、かの藩世子の病を癒し、江戸城内の急を救ふにとどまらず、これにて市中にはびこる瘡毒を掃ひ、諸人のわざはひをのぞかう。篠山藩は秘方を外に出すことを禁ずる。藩禁、なにもものぞ。わしの秘方はもはや一藩の狭きには閉ざされぬぞ。今よりひろく世に術をほどこして、厄病のひとを侵すことをふせぐ。これ仁をおこなふ所以ぢや。(四〇八、四〇九)

つまり藩禁に囚われることなくみずからの秘方を諸人に施すという大志、ひろく《仁をおこなふ》大望があるわけである。そこからすれば、《はやく有用の二匹を殺して、他を救ふに如かず。これまた狐をして仁をおこなはせるに似るか》(四〇九)という犠牲を求める論理に嘘はなかつたのである。仁を行なうために「生類憐みの令」を発した綱吉の時

代にふさわしい論理と言えようか。

既に《地上にワナを張つて山野の霊異をもとめる。ワナにかつたものは狐であつた。狐毒よく瘡毒を制する。狐の生肝の効能は奇蹟ではない。これを薬物として用うるに至つたのは、ともかく人智のすすむところ狐智にまさつたといふことだらう》(三九六、三九七)という語り手の言葉もあつた。本草学的世界観に基づけば、瘡瘡治療における狐の生肝の有用性は否定できないものだったのである。

さりとて狐の側としては受け入れ難いはずだったこの本草学的な発想に基づく仁の論理が、意外にもあつさり受け入れられることになる。鶴を襲つた犯人は狐だ、というのが言いがかりではなく、事実だったのである。

犯人であると名乗り出た狐の余一は、《狐智はつひに人智におよぶまい》、《人間の智慧》がうらやましい、《今生には叶はずとも、来世にうまれかはつて、もし人間となつたとすれば、望はたりる》と考へ、《尋常の狐の餌には目もくれず、もつぱら山野を駆けめぐつて、靈草を見つけては、お長にもこれをわけあたへて、ともに食ふ。ことに鶴は靈鳥とさけば、かの池のほとりにおそつて、これもお長とふたりで食つた》(四一〇)と言う。《しかるに、靈草靈鳥をむさぼり食へば食ふほど、血をきよめるところか、体内の狐毒はますます火をふいて燃えさかるばかり。これ狐智のあさましさか》(四一一)と、結局うまく行かない。

余一はさらに続けて次のように言う。

所詮このままにすぎれば、わが身でわが身の毒にあたつて、黒血を吐いて死ぬることは目に見えてをる。今、桃庵先生のお説をうかがふに、血気さかりの狐の生肝こそ卓効ありとやら。どうせ死ぬるい

のちならば、ここに一類のめんめんになり代り、かつは鶴のつぐのひととして、先生の手にかかつて、いさぎよく最期をとげよう。来世は人間にうまれかはること叶はずとも、これはかへりみて悔なき死か。

人智に憧れ、人に生まれ変わることを願ひ、靈草靈鳥を盛んに摂取したが、体内の狐毒が募るばかりであった、これも狐智の浅知恵の結果か、と、人智に憧れてはみたものの結局人智と狐智とのギャップを痛感させられるだけだったと告白し、もはや未練もなく、潔く生肝の提供を申し出ている。

これに対して桃庵は、『されば、智は毒のきはみぢや。狐毒のきはまるところ、あるひは凝つて人智とならぬでもない。なんぢ来世に人間にうまれかはつたとすれば、けだしおのが身を焼きほろぼす毒のききめぢや。もし人間となつたせつは、つとめて医をまんで、このわしのころざしを継げよ。』(四二二)と応じ、余一は『それでは、ねがはくは、今から先生御門下のはしにお加へくださるやう。』と返す。

智は毒の極みであり、狐毒が極まって人智となるかもしれない、という独特の〈智と毒の弁証法〉とでも呼ぶべき錬金術的逆説的論理によって与一が人間の医者に生まれ変わり、医学に貢献する可能性が示唆される。

『世にまれな神医のおんすがたを、まのあたりに拝することぢや。なにしに異存がございませう。』と江戸の稲荷狐の頭領・十郎もこの顛末を積極的に受け入れる。桃庵の唱える弁証法的論理は狐にとつても光榮なもの、完全に承服したようだ。江戸の外の狐・穴守の赤鼻だけは一匹狼(一匹狐)的に異議を唱えるが、所詮、力及ばず、疱瘡流行と篠山

藩邸の鶴の殺傷に関わる一件はこうして片が付く。

四 後日談—江戸時代医学史・高野長英・胡笳

前章までで見たように、第五代將軍綱吉に起きた疱瘡流行と篠山藩邸の鶴の殺傷に関わる一件は、篠山藩医・柚木桃庵に江戸の狐・余一とお長が生肝を提供する形でひとまず落着したが、余一とお長の宿願、人智を持った存在に生まれ変わりたいという宿願は残された。

綱吉治世から百年以上経ったのちの文政年間(一八一八―三〇)のこととして、次のような後日談が示される。

後代におよんで、文政年中、長崎の町に一箇の秀才があらはれて、オランダ人について紅毛の医術をまなんだ。修めるところは痘科をもつぱらにして、ただちに秘義をさと、つぶさに難問を解き、俊敏ひとをおどろかした。またよく蘭語をあやつり蘭文をつづることは、かの国のひとにおとらない。秀才に妻あり、これは花容ならびなかつた。夫妻ともに尋常のものとは見えぬけはいを察して、ひとはその前身がもしや狐ではないかとうたがった。秀才夭折、妻ほどなくあとを追つて、伝なし。生前、ひとと交ることを好まず、生国身許すべて知れぬままにをはつた。(四二三、四一四)

長崎の町に現われた蘭語に優れた蘭方(痘科)を学ぶ秀才とその美しい妻。おそらくこれが余一・お長の生まれ変わりなのだろうと読者は理解し、夭折ながらも人に生まれ変わるといふ宿願を果たした二人にまづは安堵するだろう。

生まれ変わって登場する土地が長崎であるのは、〈狐智〉〈狐毒〉から〈人智〉への変成を體現した存在である以上、けだし必然的なことであった。最先端の西洋の〈智〉や文物を移入する江戸時代における唯一の対外的窓口、〈智〉の発展性・横断性を支える貴重な土地であったのだから。そのような土地であれば、狐／人間の違い＝横断性など何ほどのものでもなかったと言っても良いかもしれない。

この後日談部分はごく短くあっさりした記述ではあるが、しかし、三つの点で大きな広がりを含んでいる。

まず一点目は、漢方から蘭方（ないし漢蘭折衷）へという江戸時代の医学史上の大きな展開を踏まえているという歴史的な広がりである。

漢方においても、戦国時代末期に成立した曲直瀬道三流（後世派）を陰陽五行説や運氣論といった空理空論に依拠しているとして批判し、「傷寒論」等に基づく実証性を重んじる流れ（古方派）が、儒学における古学とも連動しつつ出てくるが、その実証性がオランダ医学（紅毛流医学）の摂取によって推し進められていったことは、例えば解剖学における杉田玄白らのエピソード等を通じて、よく知られている²⁵。

柚木桃庵は紛れもなく漢方医で、長崎遊学体験などもなさそうである。

桃庵は將軍綱吉の時代の人、この時代、オランダ商館医としてドイツ人エンゲルベルト・ケンペル（一六五一―一七二六）が来日、元禄三（一六九〇）年から六年まで滞在し、江戸で綱吉にも謁見しているが、没後出版の『日本誌』がヨーロッパに大きな影響を与えたのとは対照的に、『我が国医学への直接的影響はあまりみられない』（青木、五〇頁）。他方、余一の生まれ変わらしき文政年間の秀才は長崎でオランダ医学を学んでいた。

人類の天然痘（痘瘡）との戦いについては、既に「二」でも触れたが、

一度罹ると二度と罹らないことは古くから経験則で知られており、『天然痘患者の痘漿や痘痂を健康人に接種し、軽度の天然痘に罹らせて免疫を得ようとする人痘法』（青木、二一八頁）がインド、中国、トルコなどで行なわれてもいた。日本では、宝暦三（一七五二）年に清の医学書『医宗金鑑』（二七四二）が渡来、この書を通じて中国式人痘法を知った秋月藩医尾方春朝が、一七九〇（寛政二）年に初めて秋月藩内の農民の子どもたち接種して成功させる（青木、二一九頁）。

人痘法は真正の天然痘に罹患する危険も多かったため、より安全な予防法として牛痘法がイギリス人エドワード・ジェンナーによって開発されたのが一七九六年、来日中のシーボルトによる牛痘法による接種もあったようだが、失敗に終わる（青木、二二二頁）。日本最初の牛痘法による種痘の成功は一八四九（嘉永二）年、長崎在住の佐賀藩医・檜林宗建によるもので（青木、二二二頁）、「狐の生肝」における長崎の秀才が活躍したのは文政年間とあるから、牛痘法は知られていたもののまだ国内の成功事例はないという過渡期的段階、実践されていたのは人痘法という時代であった。

二点目に進もう。先ほどの本文引用部分にすぐ続けて次のようにある。

わづかに、一人の友があつた。高野長英である。長英は長崎にあそんだとき、かの秀才と識つて、友として善く、日夜往来、蘭方の学習をきそつた。長英の学術すぐれて、ことに蘭語に熟したのは、多くこの狐友に負ふといふ。（四一四）

かの高野長英の蘭語への習熟を手助けした『狐友』。もちろんフィクションな存在と言うほかないが、余一の生まれ変わらしきこのフィク

シヨナルな登場人物が、幕末期の開明派、近代化への先覚者として渡辺崋山と並び称される高野長英⁽²⁶⁾（一八〇四「文化元」ー一八五〇「嘉永三」）という実在の人物に関連付けられることで、作品世界の文脈・背景が一気に大きく広がることになる。

文政七（一八二四）年、高野長英は、オランダ商館医として来日したドイツ人フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト（一七九六ー一八六六）のもとで学ぶべく、係累の反対を押し切って長崎に遊学、出島の外に開設された鳴滝塾で学び、群を抜く語学力を発揮するも、文政一一（一八二八）年、シーボルト事件が起ると長崎を逃れる。「狐の生肝」の夭折の医学生は、この時期の長英の蘭語習得を支えたことになる。

歴史上の長英のその後について詳説する必要があるまいが、江戸帰還後、医業を営みつつ、生理学的研究に努め、渡辺崋山の依頼により蘭書翻訳を行ない西洋事情を提供する。「夢物語」（天保九「二八三八」）における幕政批判により永牢処分（蚕社の獄）、放火により脱獄⁽²⁷⁾、宇和島藩に匿われて兵書翻訳を行うこともあったが、江戸に戻り、沢三伯の名で医業を営んでいたが、嘉永三（一八五〇）年、捕吏に襲われ自刃する。享年四十六。

科学的知識とそれに基づく現実認識・世界認識を持った人間が、江戸末期の政治的な混乱の中で斃れていった一例ということになるが、この長英の人生の一時期と接点を持たせたことで、「狐の生肝」の「四」後日談部分は、西洋化・近代化という大きな歴史的パースペクティヴを獲得することになった⁽²⁸⁾。

さらに三点目。長英への言及に続いて、作品最末尾に次のようにある。

ひとの記すところに依れば、かの秀才は談話のふしぶしに、ごくまれにはあるが、胡笳の鳴るごとく、突然いづれの国のことばとも判らぬ音を発したさうである。（四一四）

《ひとの記すところに依れば》とさきも典拠ありげに断っているが、ここはひとまず虚構中の演出と見ておこう。既に《夫妻ともに尋常のものと見えぬけはいを察して、ひとはその前身がもしや狐ではないかとうたがった》とあり、《狐友》という言葉も用いられており、《いづれの国のことばとも判らぬ音を発した》とすることで異類性の暗示を念押ししているわけだが、なぜ特に胡笳に類えられているのか⁽²⁹⁾。

中国で狐＝胡の音通（現代中国語でも「狐」と同音）により狐が胡氏と名付けられることが多く、例えば干宝『搜神記』卷十八（二十卷本）所載、弟子に学問を教える化け狐・胡博士の話はよく知られているように、しかし、作中でわざわざ胡笳としている以上、それだけではあるまい。

『日本国語大辞典』によれば、「胡笳」は《昔、中国北方の胡国の人の吹く笛。葦の葉で製したもの。》とあり、李陵「答蘇武書（蘇武二答フル書）」の一節《夜不能寐、側耳遠聽、胡笳互動、牧馬悲鳴》が例文に採られている。『文選』や『統文章規範』に収められる有名な文章である。胡笳の出て来る部分について、前後も含め、書き下し文で引いておこう。

初め降りしより、以て今日に至るまで、身の窮困、独坐愁苦、終日観^みる無く、但だ異類を見るのみ。「略」目を挙げて言笑すれども誰と与にか歎を為さん。胡地玄冰、辺土惨裂、但だ悲風蕭条の声を聞^{きこ}くのみ。涼秋九月、塞外草衰ふ。夜も寐ぬる能わず、耳を側^{そば}てて

遠く聴けば、胡笳互に動き、牧馬悲鳴す。吟嘯群を成し、辺声四もに起る。晨に坐して之を聴き、覚え涙下る。嗟乎子卿、陵独り何の心か能く悲しまざらんや。（『新釈漢文大系 第57巻』明治書院、一九七七、七六六頁）

《嗟乎子卿》というのは蘇武への呼びかけ。異境である匈奴の地に抑留された李陵がその孤絶の思いを語っている。

胡笳についても一つ参照しておきたい。『唐詩選』にも収録された有名な七言古詩、岑参「胡笳の歌 顔真卿の使いして河隴に赴くを送る」である。書き下し文で全体を示しておこう。

君聞かずや 胡笳の声 最も悲しきを
紫髯緑眼の胡人吹く
之を吹きて一曲猶お未だ了らざるに

愁殺す 樓蘭 征戍の児

涼秋八月 蕭関の道

北風 吹断す 天山の草

崑崙山南 月斜めならんと欲し

胡人 月に向かい胡笳を吹く

胡笳は怨みて将に君を送らんとす

秦山 遥かに望む 隴山の雲

辺城 夜夜 愁夢多し

月に向かい 胡笳 誰か聞くを喜ばん（川合康三編訳『新編中国名詩選（中）』岩波書店、二〇一五、三九九頁）

四句目の《樓蘭 征戍の児》は《樓蘭を守備する漢人の若者》^③の意。

胡笳について、さらにもう一つ触れておくならば、『樂府詩集』巻五九収録の長詩「胡笳十八拍」が挙げられよう。

事典の記述を借りて概観すれば、『後漢末の戦乱のさなか、中原から匈奴に拉致（らち）されて2人の子を生み、やがて子供を置いて中原へ帰った女性の、悲痛な嘆きを切々と歌う。この詩は、後漢末の大学者蔡邕（さいよう）の娘で、「悲憤の詩」の作者である蔡琰（さいえん）、字（あざな）は文姬（ぶんき）の自伝的作品とされてきたが、近來この説の真偽をめぐって論争が起った。論争の決着はまだついていないが、後代の偽作だとする見方が有力である。（井波律子）』（『デジタル版英社世界文学大事典』JapanKnowledge）となる。詩句の紹介は省くが、辺境への拉致、辺境における苦難の境遇を象徴するものとしての胡笳というイメージは明らかだろう。

石川は何よりもまず長崎の秀才の前身を仄めかす異類めいた発語を胡笳の音と形容したわけで、後日談Ⅱ「四」に入る手前の箇所、桃庵に従う若い男女の狐を狐たちが見送る場面にも《耳なれない囃子の音》《異国の曲とおぼしいその音》が書き込まれており、音楽・楽器の文脈が作られ、しかもその《異国》性が言われてはいた。

だが、書き込まれた胡笳の語からこれらのよく知られた詩文を思い合わせてみれば、異国性、辺境性、遼遠さ、悲哀、哀切、孤独……といったイメージ・情感の膨らみも呼び寄せられよう。厄除け祈願から医学へ、漢方から蘭方へ、漢学から洋学へ、鎖国から開国へ、といった江戸前期から幕末期へという江戸時代の歴史的な大きな転換を踏まえた一篇だが、末尾はこのような一種の余情を湛えるものであった。

おわりに

以上、「狐の生肝」一篇について、素材の存在と石川淳の創意との両面に目配りしながら考察し、転生譚の仕掛けなども交えつつ医学史・科学史上の大きなパラダイム転換を狐・稲荷の信仰・民俗・文化をふんだんに活用して語ってみせた作品であることを確認した。

文明・社会の転換という大きなテーマへの作者の関心の存在は見落としていないが、自然主義系のリアリズムに拠らない近世的な発想を踏まえた想像力の遊びの面も見落とさないようにしておきたい。

冒頭、狐火を点しながら王子・名主の滝のほとりに狐たちが集まる場面は、「二」でも触れたように歌川広重「名所江戸百景」の一枚「王子装束多の木大晦日の狐火」という幻想色豊かな図像を想起させる。また、稲荷狐たちの会合の場面での、それぞれの稲荷の由来等を踏まえた軽妙な会話の応酬も楽しい。

生肝の提供を受け入れるという余一の深刻な決意を語る言葉に続けてお長に次のような可憐な言葉を言わせるその緩急の転じ方、メリハリも心憎い。

「余」どのの生肝を取られるなら、わたくしの生肝もごいつしよに。おもへば、あの池の鶴も夫婦、これは狐の夫婦。桃庵先生はこの成行をお見とほしなされてか、一番つがとはうれしいお謎でございまして。いつぞや、猿若町の芝居をのぞいたとき、なにやらの道行といふ狂言を見て、ほんに人間の恋はうつくしいものと、うらやましく存じてをりましたが、けふおもひがけなく、この首尾にめぐりあつ

て、もう今生にこのころのこりはございません。このうへの望には、いざ死ぬるといふまぎはに、あの芝居の役者そつくりの、花のすがたに化けてみたい。」(四一一)

この作品を十分に味わうには、作者石川の洞察と遊びと、これら両面を受け止める柔軟さが求められよう。

「狐の生肝」は狐たちを重要な登場人物(登場動物)とする作品であったが、この作品以外にも石川には狐の登場する作品が複数ある。簡単に確認し、《石川淳作品と狐》について見通しを得ておきたい。

まず、戦中の作品「雪のはて」(『文学界』一九四二・七)。末尾近くで、語り手が《うらかな春の野べ》の春風駘蕩たる景色を想像し、《図をあしらふとすれば、糸遊に狐があそぶといふけしきだらう》と述べる。⁽³⁾おそらく、凡兆の《野馬かげふに子共あそばす狐哉》(『猿蓑』卷之四・春)⁽⁴⁾が揺曳しているのが、実体的に登場する存在ではなく、語り手の脳内に描き出された存在にとどまる。⁽⁵⁾

敗戦後の「変化雑載」(『表現』一九四八・二)。

せまい坂の、ここも両側はすすきと雑草と入りみだれた露の道で、そのとき、そのすすきのかげになにやらさつと白く走つたのに、あ、きつね……まさか、と見るまに、やつぱり人間の、うづくまつてゐたのが、ぱつと立つて、若い女のシューミーズ一枚、しろじろとして、手足がほそく痩せてゐるのに寒さうなけしきもなく、ちぢれた髪をふりなびかせて、鳥などの飛び立つやうに、もう向うへ駆け出して行つた。(『石川淳全集第三巻』筑摩書房、一九八九、四八頁)

語り手の視野に入った女性を、一瞬、狐かと思ったという見間違えに過ぎない。ただし、敗戦後の混乱期における人の実像の捉えがたさ、変化するさまを取り上げたこの作品全体を、変化する存在である狐のイメージが貫いていることは間違いない。

「鳳凰」（『別冊文藝春秋』一九四九・一二）。《名越登喜子がキツネツキになつたと聞いて、掛川兼雄はとたんに漠然たる解放を感じた》（『石川淳全集 第三巻』四七九頁）という一文で始まるこの作品は、全体が悪夢であるかのような幻視・幻想的な語りで、自然主義系リアリズム流の作品として読み解くことが難しいが、登喜子の作中唯一の発言、《救ひは人間にもとめません。遠いかなたから歌がきこえます。遠いかなたのひとつのために、あたくし作曲いたします。》（同四九一頁）から登喜子の《キツネツキ》ぶりを判断するとすれば、閉塞感に満ち、変革の期待を抱けない社会の中で、《遠いかなた》としか関われない夢想的な姿勢のことを狐に憑かれたと言っていると理解できそうである。

「野守鏡」（『群像』一九五〇・一）。

さういつて、道春は望遠鏡を取りなほして、もう一度バルコンのはうにびたりと狙ひをつけた。すると、突然そこに呼び出されたやうに、バルコンの上にゆらゆらと、霧が凝つたのか、魔の影か、まつしろなものが走り出た。

「や、白狐。」

「ちがふよ。伊都子だよ。白のイヴニングを着てゐるのだ。」（同五四七頁）

「変化雑載」同様、一瞬の見間違えである。ただし、ここでもおそらく

伊都子が一度でも白狐に見えたことは、その時だけのことでなく、作品全体を通じての伊都子の捉えがたと切り離せないものなのだろう。

「紫苑物語」（『中央公論』一九五六・七）。主人公・宗頼に射られて傷を負った小狐が若い女・千草に化けて宗頼に近付く。当初は狐の妖術によって得られる情報で宗頼を惑わせ、色仕掛けで精気を吸い取ろうと、仕返し目当てで近付いたのだが、二人は深い契りで結ばれ、性愛の喜びを尽し、ついには《魔神》（『石川淳全集 第五巻』筑摩書房、一九八九、三四九頁）たらんと岩山での平太との決戦に臨む宗頼のために弓と化す³⁴。

宗頼が知の矢、殺の矢、魔の矢と段階を踏んで弓の技術のステージを上げてゆくという一種弁証法的な構図に、最後に、さらに狐⇨千草が弓と化して加わるという展開は、《狐智》《狐毒》の間の弁証法的な関係、《狐智》が徹底される（《狐毒》と化す）ことで一種止揚⇨揚棄を経たかのようにして得られる超常的な能力という「狐の生肝」の構図に繋がるものである。

このあと「狐の生肝」が挟まり、「二人権兵衛」（『別冊文藝春秋』一九六一・一二）。この作品については、《憑依の論理》とも言うべきものが適用されており、以前「至福千年」を論じた際にその先駆作としてこの「二人権兵衛」に触れており、その時の拙文を引用しておく。

ところは葛飾の在、船橋のあたり、時は天保の飢饉、《大坂の「大塩様」といふひとが謀叛をおこしたといふうはさはつとに葛飾の在にまできこえてゐた》³⁵天保八（一八三七）年。神社の縁日に奉納する神楽が大好きで貧農ながら脳天気生きるゴンベが、下野那須あたりの郷土出身で狐釣りで生計を立てている権兵衛の仕掛けたワナ

から図らずも白狐を救ったために権兵衛に脅され、孟蘭盆までに米一俵を返済するという証文と引き替えになんとか首がつながる。救小屋のできた品川、板橋、千住、新宿の四宿に、《狐の面をかぶつた男が鉦をたたきながらをどつてあるくといふ。いや、人間ではない、狐が化けたのだといふ。いや、化けたのではない、老狐もまつしろなやつが飛んだといふ》《奇怪なうはさが立》ち、それはやがて《浅草の奥山とか両国の広小路とか、目貫のさかり場にあらはれ》、投げ銭が飛ぶようになる。この《豊年をどり》を踊るのは、白狐が乗り移ったゴンベであった。⁽³⁶⁾

孟蘭盆になり証文通りゴンベのところへ取り立てに向かう途上、《豊年をどり》の一群に巻き込まれた権兵衛は、白狐の霊力で代官所を襲う一揆集団へと転じた一群の首領と目され、直ちに首を斬られる。

幕末の大飢饉という世情を背景に、稲荷信仰ほか狐にまつわる伝説（那須、中山法華経寺など）を絡ませて、分身（身代わり）同士の運命の逆転（証文の文言の逆説的実現）を描いて見せたこの作品は、飢饉下という不安定な世情の中で非日常を期待する不穏な群衆心理（一揆にも転化しかねない）を《豊年をどり》という形で書き込んでおり、幕末混乱期の世直し計画を描いた「至福千年」と、単に白狐の霊力といった仕掛けレベルに留まらず、世情と人心の不安定さの中に物語を構えているという点でも明らかに連続性を持っているだろう。

一応、白狐の報恩（対ゴンベ）と報復（対権兵衛）ということの説明が付くが、発想・着想という点では、そのような一種前近代的民俗的な説明にことよせて、飢饉下の不穏な群衆心理を描いてみせ

たことが面白いとも言えるし、あるいは逆に、そういう社会的政治的な群衆心理をあえて狐の霊力・狐の憑依力といった論理体系で説明してみせたことが面白いとも言えるだろう。川村邦光「狐憑きから「脳病」「神経病」へ」⁽³⁷⁾は、関係性の中で発現する憑依が個人の病としての精神病へと読み換えられてゆく推移を論じているが、ここに見られたのが説明体系の切り替え（パラダイム・シフト）だったとすれば、「二人権兵衛」における作者石川の関心は近代・前近代の二つの説明体系の架橋あるいは重ね合わせにあったと言えるかもしれない。（「石川淳「至福千年」論—〈憑依〉の論理学・〈憑依〉の政治学」『日本女子大学紀要 文学部』62、二〇一三・三、二三、二四頁）

そして長篇「至福千年」（『世界』一九六五・一―一九六六・二〇）。こちらの作品では、〈憑依の論理〉が人間が別の人間に憑依することも含めて全面的に駆使されており、狐と言えば、宗教的蜂起の指導者・加茂内記が白狐の妖術を活用する。

なお、「狐の生肝」との関連で見落とせないのが内記の次のような発言である。

「わしも加茂の家にはうまれたが、家風をきらつて、洋学の片はしをのぞかうと、長崎にとどまるうちに、いつか異国の教が身にしみるに至った。社に仕へるなら、京あたりにもつてがあるのに、わざと東のはてに下つて、この稲荷の社に世をしのぶことにしたのは、じつはこころやすさをおもへばこそぢや。そもそも稲荷とはなにの神やら正体の知れぬ風来坊ぢやよ。風来坊の社とあれば、そこにひ

と知れず異国の神をいつき祭つても、罰はあたるまいて。それにわしが無防備な術をもつていさか名をえてをることも、ひと目をくらまずに便宜といふものよ。」(『石川淳全集 第八巻』筑摩書房、一九八九、三〇頁)

西洋(洋学)への憧れが主要人物に共通しているが、内記もまた洋学への憧れを持ち、そこから松太夫や源左と並んでキリスト教信仰へと進んで行ったことがわかる。出自は賀茂神社(上賀茂神社) 祠官家だが、キリシタン信仰の〈隠れ蓑〉に江戸の稲荷に関わっている。

「伊勢屋、稲荷に犬の糞」と江戸名物に数えられたほど江戸市中にありふれていた稲荷社であり、だからこそ内記一派の地下活動のアジトとして稲荷を転々とするこゝもできたのだが、《そもそも稲荷とはなにの神やら正体の知れぬ風来坊ぢやよ》という稲荷信仰の捉え方、その習合性への着目は、稲荷神の《すさまじい姿》や《荒ぶる神》としての性格を押し出していた「狐の生肝」と《正体の知れ》なさにおいて接続しつつも、《風来坊》という外来性を匂わせるニュアンスの付加も見られ、幕末を舞台に開国をめぐる物語であることと切り離せない。

さらに、「至福千年」連載中に発表された「無明」(『新潮』一九六六・五)。登場人物の一人について《走ることは狐よりも速く》(同五〇六)とするのは比喩に過ぎないが、別の箇所には《野遊のかへりに、夕ぐれの墓地を通りすぎると、堤の下の草かげになにやら坊主あたまのあやしきものが駆けてゆくのを見つけた。さだめて狐狸なんぞのしわざか》と二人の武士が追い詰め、斬り殺したところ、《老狐が坊主の生首の肉を食ひつくして残ったあたまをかぶつてゐたものと知れて、兩人武辺のほまれはなほ高くなつた》(五〇八)が、やがて一人(狐を斬り殺

したほう)は評判を落とし、《狐のたたり》(五一〇)が取り沙汰されるに至る。ここでは、人の社会的な声望に関わることで、《狐は祟る》という信憑が活用されている。

以上、狐が登場する石川作品をざっと確認してみたが、場面のイメージ、登場人物の性格と絡ませるという活用法から、社会構造の変化や動揺と絡ませるという活用法へと推移したと見ることでできそうである。

なお、小説ではなくエッセイだが、石川は「狐」(『すばる』一九八三・一〇)で、祐天上人を騙る狐が若い娘に乗り移ったのを大田南畝が見顕わしたというエピソードを、同席した大郷信斎『道聴塗説』の記述から紹介しつつ、《一かどの士人が怪異を語つて、咎を狐に負はせるまへに、それがはたして狐のしわざかどうかを疑ふにはひが無い。これでは人間は狐に化かされるために配置されたやうである。後世からいへば、そこが不思議に見える》と述べている。フィクションでは思うさま狐に通力を発揮させる石川だが、作品外の現実の話としてはまた別なのだろう。この峻別ぶりもまた興味深い。

【注】

- (1) 《パラケルススはディオスコリデスの『マテリア・メディカ』にある言葉を引き、「すべての物質は毒である。毒でない物質は存在しない。ある物質が毒となるか薬となるかは用いる量による(毒は薬なり)」と唱えている。船山信次『毒と薬の世界史—ソクラテス、錬金術、ドーピング』中央公論新社、二〇〇八、六三頁
- (2) 卷十九 修務訓、『新釈漢文大系 第62巻 淮南子(下)』明治書院、一九八八、一一一八頁
- (3) 「杉本つとむ著『江戸時代蘭語學の成立とその展開』あとがき」『石川淳全集 第十九巻』筑摩書房、一九九二、一一四頁
- (4) 石川淳『森鷗外』(三笠書房、一九四一、一五〇頁、「傍觀者の事業に

- ついで二諸国物語」の《ただ刻下の現実の相よりほんの少し速く、一秒の何千万分の一をいくつにも割つた一つぐらゐ速く、空虚なる空間を充実させようとする精神の努力を小説だと、ここでたつた一度だけ考へておく。》を踏まえる。
- (5) ただし、作品名を間違つて「靈藥十二神丹」のことと記している。
- (6) 北区飛鳥山博物館編『企画展図録 徳川家光と若一王子縁起絵巻』東京都北区教育委員会、二〇一八、五四頁
- (7) 『大田南畝全集 第十八卷』岩波書店、一九八八、六三三頁。古く、『新燕石十種 第二』(国書刊行会、一九二二)に翻刻。
- (8) 若くして生肝を取られることになる余一とお長とが特に神社を背負っていないのは、実在する稲荷と対応させ難いという物語上の都合によるものだろう。
- (9) この《住く》の箇所、内藤耻叟・小宮山綏介標註『近古文芸温知叢書 第十編』(博文館、一八九一、七二頁)では《住》と翻刻する。「すみ」と読ませるのであろう。
- (10) なお、この篠山藩の下屋敷を預かる古島大八、以前は《美男》(三九七以下、「狐の生肝」からの引用は『石川淳全集 第六卷』(筑摩書房、一九八九)に拠ることとし、底本のノンブルを引用末尾に括弧で括つた漢数字で示す)だったのが今は《満面アバタ》で見る影もない《異相》の男とされているが、「疱瘡の見目定め、麻疹の命定め」《疱瘡はその軽重によつて容貌の醜がきまり、麻疹は、その軽重によつて生命の長短がきまるということ》『日本国語大辞典』Japan Knowledgeによる。以下同。)とも言われたように、疱瘡には、命は助かつても痘痕というもう一つの大事があった。
- (11) 『怪異・きつね百物語』雄山閣出版、一九九八、一三七頁
- (12) 「窓のすきみ」に明示的に触れた石川のエッセイとして、「金銭談」(『文学界』一九五一・一二)、「神崎与五郎」(『すばる』一九八三・一二)がある。いずれにおいても石川は著者をなぜか山崎堯臣と記している。
- (13) 『日本随筆大成 第二期第三回』日本随筆大成刊行会、一九二八、四〇九、四一〇頁。吉川弘文館版『日本随筆大成 第二期5』(一九七四)収録本文と異同無し。
- (14) 奈倉道治「尾張藩・名古屋を中心とした江戸時代の医療の流れ」(『日本医史学雑誌』一九九五・五) 参照。
- (15) 井上敏幸、『日本古典文学大辞典 第三卷』岩波書店、一九八四、四九五頁
- (16) 『叢書江戸文庫12 馬場文耕集』国書刊行会、一九八五、一八五頁。既に明治時代の段階で、中根淑(校)『百万塔 第八卷』(金港堂、一八九二)に翻刻されている。
- (17) 中村幸彦、『日本古典文学大辞典 第四卷』一九八四、四二二頁
- (18) ただし生類憐みの令と総称される施策が始まったのは、一六八六(貞享三)年以降とされており、綱吉のただ一人の息子・徳松が亡くなった一六八三年よりもあとのことである。綱吉には娘・鶴姫(一六七七～一七〇四)もいたが、子どもができないまま亡くなるのは第三代紀州藩主・徳川綱教に嫁してのち、二十七歳の時のことで、これは語り手の言う《江戸城大奥》にいる《綱吉のこども》(三八九)ではあるまい。前章「一」で見た素材たちも綱吉の時代と特定できるものは少なく、その点、きめ細かく史実に対応させるといふ執筆姿勢ではあるまい。鶴姫については、綱吉が一六八八年頃出したと言われる鶴字法度(このため晩年の井原西鶴は井原西鶴と名を改めたとされる)のことが篠山藩邸の鶴殺傷との関連で気になるが、鶴はもともと素材となったエピソードにも書き込まれており、無理に関連付けなくとも良いか。徳川綱吉、生類憐みの令については、塚本学『徳川綱吉』(吉川弘文館、一九九八)、仁科邦男『生類憐みの令』の真実(草思社、二〇一九)など参照。
- なお、石川は「偽書」(『すばる』一九八六・六)で綱吉の「悪政」を書き連ねた「三王外記」に言及している。
- (19) 『日本疾病史』平凡社、一九六九、一〇九～一一一頁
- (20) 金井金吾校訂『定本 武江年表』筑摩書房、二〇〇三、二〇〇四、中・二六九頁、下・一三四頁
- (21) 疱瘡神については、畑中章宏『日本疫病図説』(笠間書院、二〇二二)も参照。
- (22) 五来監修・著『稲荷信仰の研究』山陽新聞社、一九八五、三頁
- (23) 中村積里『狐の日本史—古代・中世篇』(日本エディタースクール出版部、二〇〇一)、『狐の日本史—近世・近代篇』(同、二〇〇三)など参照。
- (24) 石川「靈藥十二神丹」(『新潮』一九五九・二)に、練丹術をよくする《一拍道人といふ神医》の弟子であり《丹を練る手つだひをしたために、靈気の烈しきものを顔に受けて、小童いつか老人のやうに皺くちやになつ

た」(前掲『石川淳全集第六卷』三四三頁)という異相の人物が登場する。本草と練丹との違いはあるが、日本を舞台にした歴史小説における中国的道教的要素を体现した人物という点で柚木桃庵と明らかに通底するものがある。拙稿「石川淳『靈藥十二神丹』論―典拠『武辺雜談』と練丹術と」(『国語と国文学』二〇二・四)を参照。

- (25) 青木歳幸『江戸時代の医学―名医たちの三〇〇年』吉川弘文館、二〇一二

- (26) 石川には伝記小説『渡邊畢山』(三笠書房、一九四二)があり、『蘭語の中に生誕し、発展し、げんにシイボルト直門の秀才であり、江戸一流の医家である』(『石川淳全集第十一卷』筑摩書房、一九九〇、四一頁)長英にもじっくり紙幅を費やし、蘭学の意義と先覚者の苦難を書き込んでいた。

- (27) 脱獄後、長英は硝酸で顔を焼いて人相を変えたという風説がある。これは、本草の毒ゆえに異相となった柚木桃庵のあり方と通い合うところがある。

- (28) 長英について、佐藤昌介は『蘭学者のなかでも、もっとも知名度がたかい人物のひとりであり、とくに進歩的な知識人の間にファンが多い。それにもかかわらず、かれの事歴が明らかにされているかといえは、かならずしもそうではない』(『高野長英』岩波書店、一九九七、i頁)と指摘し、伝聞類の多さを言い、鶴見俊輔は『歴史上の実在としての長英には、ついに実証的方法としてはたしかめ得ないところが多く、長英が各地にまきちらしたうわさの種の中に時代を超えて生きる長英の力がやどっている。長英は、彼とともに生きるものの中にあると言えよう。著作の中にいるとも言えず、歴史上の記録の中にもいるとも言えず、記録の辺境にある人物として高野長英は、彼特有の魅力をもっている』(『評伝高野長英 1804-1860』藤原書店、二〇〇七、四〇二頁)とする。『狐の生肝』において高野長英が主観的に描かれたと見ることはできないが、噂や伝聞の対象となり、さまざまな異説を生み出す存在についての石川の関心は、例えば「普賢」(ジャンヌ・ダルク)「義経」「焼跡のイエス」(処女懐胎)「聖母マリア」(鸚鵡石)「豊臣国松延命伝説」などに明らかである。拙著『石川淳作品研究―「佳人」から「焼跡のイエス」まで』(双文社出版、二〇〇五)一二八頁を参照。

- (29) この『胡笳の鳴るごとく』は初出になく、初収刊本である『創作代

表選集 24 昭和三十四年前期」(前掲)収録時に書き加えられた。

- (30) 竹内実『岩波漢詩紀行辞典』岩波書店、二〇〇六、三三〇頁

- (31) 『石川淳全集第二卷』筑摩書房、一九八九、二九七頁

- (32) 『新日本古典文学大系 70 芭蕉七部集』岩波書店、一九九〇、三二二頁

- (33) 「雪のはて」については、拙著『石川淳作品研究―「佳人」から「焼跡のイエス」まで』(双文社出版、二〇〇五)二八九―二九七頁を参照。

- (34) 「紫苑物語」については、拙稿「石川淳『紫苑物語』論―観念性／物質性、エクリチュールと出会うことの難しさ」(『日本女子大学紀要文学部』67、二〇一八・三)を参照。

- (35) 『石川淳全集第七卷』筑摩書房、一九八九、一五三、一五四頁

- (36) 同、一五六、一五七頁

- (37) 『幻視する近代空間』青弓社、一九九〇

- (38) 『石川淳全集第十六卷』筑摩書房、一九九一、四三九頁。『快異』とあつたのを初収刊本『夷斎風雅』(集英社、一九八八、五七頁)に従い訂正。

*引用文について、仮名遣いは原文通り、漢字は原則として通行の字体に従い、ルビは適宜取捨した。引用文中の「」内の語は引用者による補足である。